

箱びと

文化創造研究科クリエイティブライティング領域
14001CCM 二村友子

修士制作要旨

制作の意図

本修士制作は、次の二要素を用いて執筆した。

1. 「私」が「私」、自身について書くことの不可能性と可能性。
2. 〈見る／見られる〉関係が、社会構造の複雑化に伴い、ローカルな人間関係や空間的近接性に限定されないものに変容しつつあること。

安部公房『箱男』（新潮社、1973年3月）には、書くことへの自己言及や〈見る／見られる〉関係の描写がある。以前から関心のあった二つの問題が、『箱男』を読解することで意識化された。

よって本修士制作は、『箱男』の設定を現代に置き換えて執筆した。現代を捉える新たな創作として世に問う意図をもった作品である。

梗概

時代設定は、2016年現在。舞台設定は、特定はしないが大都市周縁の住宅地である。本文は、主に「私」（遠藤）がインターネット上で公開するブログ記事という体裁で書かれる。「私」が引用する文章のほか、ブログ記事に対するコメントも構成要素であり、複数の書き手が内在する。また、インターネットという設定上、書き手の特定は困難なものとなっている。

「私」は『箱男』を研究する人物である。『箱男』を研究対象としたのは、「私」が「私」、自身について書くことに限界を感じているためだ。「私」は、「箱男」が匿名的な存在であるが故に自身について言及できない点に共感している。最近では『箱男』の登場人物の中で唯一書き手ではない「彼女」に注目し、論文執筆を試みていた。

あるとき「私」は、「箱男」に遭遇したというブログ記事を発見し、興味をもつ。その記事を書いたのは、読者モデルであった「リカ」という女性だった。『箱男』の「彼女」は元モデルである。この共通点から「私」は「リカ」と『箱男』の「彼女」を重ね合わせ、「リカ」の

ブログを閲覧し、調査を始める。

インターネット上で得られる情報のみでは満足できず、「私」は「リカ」の職場に入社し、接近する。「私」は「リカ」に書き手としての活躍を促す。自身を「男とも女とも取れるように書いてきた」として、「リカ」に性別の決定権をゆだねることにより、「リカ」が書き手となるきっかけをつくるのだ。こうして「私」は、直接話をするだけでなく、書かれたものからも「リカ」を捉えようとする。「私」のブログには、「リカ」が「私」について書いた日記帳の文章が引用されるようになる。

調査の結果、出生や経歴など「リカ」に関する情報は次々と明らかになる。だが、結果的にそれらは「リカ」が重要視しているものではなかったことが判明する。ここで、過去や経歴が「私」を構築しているという前提が否定される。さらに「リカ」は、マイナンバーを躊躇せず「私」に教えるなど、個人情報も「私」の構成要素ではないという考えを提示する。

一方で「私」は、世間や国家（法律）が個人情報を管理することで人間を選別する可能性を「リカ」に提示する。このことをきっかけに、「リカ」は「私」を自身とは異なる種類の人間と考え、興味をもって観察を始める。

「リカ」の試みにもかかわらず、インターネット上の人びとから二人は同一視される。「リカ」の服を着た「私」が「リカ」に間違えられ、ブログのコメント欄に誤った目撃情報が寄せられるのだ。「リカ」のブログ記事と目撃情報が食い違っていることが話題となり、「リカ」はインターネット上で批判される。「リカ」は動じないが、「私」は姿を消してしまう。

3週間後、「リカ」の父親と同姓同名の焼死体が発見される。インターネット上では、「リカ」が殺したという噂が広まる。「リカ」は覚えのない嫌疑をかけられ戸惑うも、身を守るために一人逃亡する。「私」は殺していないという思いと、「私」が殺したかもしれないという不安の間で揺れ動く。

逃亡した「リカ」のもとに「箱男」が現れ、スマートフォンを手渡し、明日「箱びと計画」なるものが開催されることを知らせる。「リカ」は、「箱びと計画」に参加する人びとの中に「私」がいると考え、探し出すことに決める。「私」に見られて嬉しく感じた経験を思い、今度はこちらが「私」を見続けようと考えたのであった。

「私」を探し始めた「リカ」の前に、箱を被った者が大量に現れる。箱は増殖を続け、街中が箱に溢れて幕が下りる。